

木曾川



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。
今回は木曾川文庫があり、蓮田が広がる立田村から、
輪中の歴史や用排水事業を中心に特集します。
また昭和の治水事業、
木曾川下流増補事業の成果を紹介しします。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記^{立田村}

自然と共生する快適環境の里をめざして

AREA REPORT

立田輪中の用排水事業と地盤沈下対策

気ままにJOURNEY

川面に流れる季節のメヌエット
立田村におだやかな時間は流れる

歴史ドキュメント

木曾川下流増補計画の主な工事と成果

TALK&TALK

立田輪中の治水と土地利用上の苦勞

民話の小箱

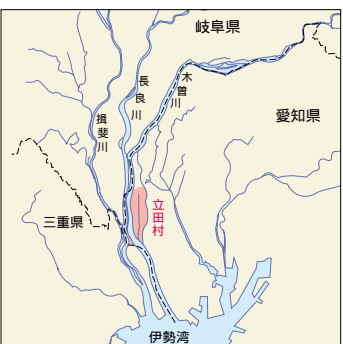
いたずらきつねのお話



かつては「輪中」として、木曾三川の猛威と闘い続けた立田村。田畑を潤す水の恩恵は、その一方で、宝曆治水や木曾三川下流改修など、治水の歴史を刻んできました。

立田村の航空写真

現在では豊かな水辺空間を生かした村づくりが進み、緑豊かな農村地帯として再生。自然と共生する、快適環境の里をめざして、多彩な事業が行われています。



石神社

徒に攻め入れられ、自刃しました。天正二年（一五七四）の長島一向一揆の際には、立田村も戦乱の舞台に。信長は三万の兵を率いて進軍し、小木江城の一揆勢を鎮圧、やがて長島一向一揆を全滅させるに至りました。



石神社

堤防の外となり、水害多発地域となりました。したがって、周囲を堤防で囲んだ輪中の完成は、立田の村々の最大の課題。一説によれば、江戸時代、立田村を支配していた尾張初代藩主徳川義直が鷹狩りでこの地を訪れた際、水害の実情を知り、輪中堤築造に着手。寛永元年（一六四四）に佐屋川右岸堤と木曾川左岸堤を結んで「田輪中」としました。そして、輪中内にたまる内水を排除するために枋を設けました。俗に「十二腹の枋」と呼ばれるもの。この輪中の中、小茂井新田が開発され、他にも重兵衛新田や船頭平の南に又右衛門新田が開発され、寛永十二年（一六三三）には福原輪中がつくられました。

天正の洪水と新右衛門新田

天正十四年（一五八六）には、木曾川の流路を変えてしまった天正の大洪水が発生。文禄三年（一五九四）、豊臣秀吉は新しい木曾川の築堤事業を実施しています。これは後の御園堤の原型を成すもので、立田の村々は、新しい堤防の外に置かれたため、破壊・洪水に悩まされることになりました。天下分け目の関ヶ原の合戦（一六〇〇）以降、中野新右衛門が開発されたと伝えられるのが「新右衛門新田」です。新右衛門は関ヶ原の合戦の落ち武者、この地に落ち延び、家来や村人の協力で、早尾の南、下二色や西二色、葛木の東に横たわる湿地帯を開発したと伝えられています。

立田輪中の成立

立田輪中は四〇数か村が集まった一大輪中。開墾率は定かではありませんが、前述した葛木の里のようにそのルーツは古代にまでさかのぼり、当初は上流からの水害を防御する馬蹄形の「尻無堤」を築いていたと考えられています。

慶長十四年（一六〇九）、犬山から愛知県弥富に及ぶ四〇kmあまりの長大な御園堤が木曾川左岸に築造されると、立田の村々は完全に

自然と共生する快適環境の里をめざして。

立田村の地形

愛知県海部郡立田村は愛知県の最西端、木曾川左岸に位置する純農村。西と南は木曾川を隔てて岐阜県と三重県に、北は八開村と佐織町に、東は津島市・佐屋町・弥富町に接しています。

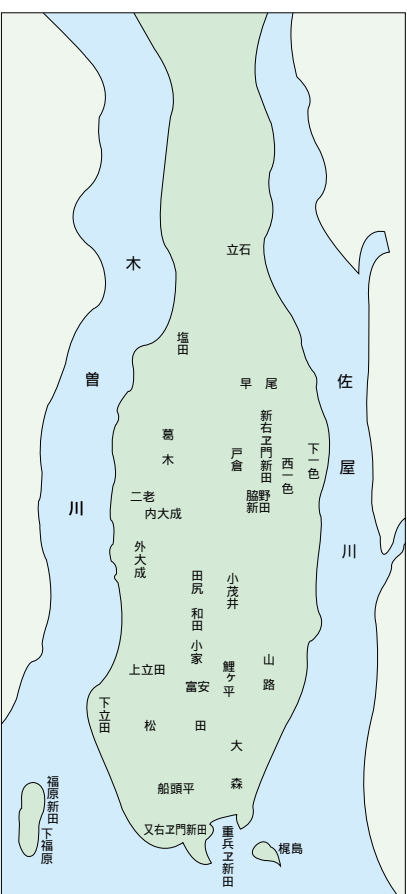
村のほぼ全域は木曾三川とりわけ木曾川によって形成されたデルタ地帯で、起伏の少ない海抜ゼロメートル地帯です。主な集落は微高地上に位置し、特に古くからの集落は旧佐屋川が形成した自然堤防沿いに分布しています。地域は東西約三km、南北約九km、細長い帯状となっており、全面積の三〇%が河川敷となっています。村の西端に長良川が流れ、福原地区（旧福原輪中を飛地にして木曾川が流れ伊勢湾に注ぎ込んでいます。また、村内にはかつての立田輪中内の排水路として機能していた鶴戸川と木曾川の旧河道の一つであった佐屋川（現在の海部幹線水路）が南流していました。これらの河川は古来よりたびたび氾濫し、人々は堤防を築き、輪中を形成して水防活動に努めてきました。輪中の形成時期は江戸初期頃、立田輪中、福原輪中などといわれています。

地名が語る古代ロマン

五世紀、古墳時代後期には、石田の石神社社叢に「こんもり茂る丘に古墳が造成された」と推定されています。もしこれが古墳であるとすれば、濃尾平野最南端の古墳。この地域には有力な豪族が存在していたと考えられます。石田の西方、葛木は崇神天皇の妃、尾張大海媛またの名を葛木高名姫命の出身地と伝承されており、妃の名から、葛木と名づけられたと伝えられています。葛木高名姫命の祖先は皇族と密接な関係にあった尾張連の一族、律令制下のこの一帯は、尾張海部郡に属していたと類推されます。

立田の里と源義朝

荘園の成立は奈良時代末期、延暦年間にはこの地にも東寺とゆかりの深い大成社・多度神宮寺鎮）が存在していました。しかし、後に神宮寺が真言宗東寺に所屬することが示され、寺領を巡って天台宗との間に紛争が起きることがしばしば、東寺はその度に朝廷に訴え、東寺領と認められています。貴族政権が崩壊期を迎え源氏と平家が覇権を争った平安時代末期、京



田村別立田輪中（安藤萬壽男氏原図により作図）

村・早尾村・立和村・川治村・六ツ和村となり、同三九年には、五会・早尾・立和・川治の四か村と六ツ和村の一部が合併して立田村は成立しました。地租改正反対運動、明治九年十一月、松阪西部から火の手が上り、同二〇日には長島から直謀者等が福原などへ入り小作人を煽動、翌二日には小作人たちが案内人となって、福原の戸長加藤家や福原学校などを放火しながら北上し、立田村山辺で名古屋鎮台の軍隊により散りじりにされました。別の一隊は津島まで入ったといわれています。

緑豊かな農業地帯を目指して

従来の立田村の農業の特色は重田掘潰れ。前述したように河川による土砂の堆積が進む輪中地帯では内水の排除が重要な課題。こうした不利な立地条件を解決するため、重田掘潰れという現象が生まれました。これは、一枚の田を溝で高盛りした田地に分けることであつた。たかも短冊のように田を作りかえたのです。これにより、微高地となった田地は湛水を防ぐことができ、溝は交通手段に利用、舟の発達を促しました。木曾川によって培われた肥沃な土砂は、実りの源泉でもあったのです。しかし自然排水だけでは大雨及び内水被害を免れることはできず、昭和二十年代から内水面干拓事業を実施、耕地整備が行われる一方、農業改善事業による機械化、農村総合整備モデル事業として農村集落環境管理施設などが完成。排水機も完備されて従来の重田掘潰れは姿を消し、新しい農村へと変容しました。

昭和五〇年に完成した立田大橋は立田輪中と福原輪中をつなぎ、長年二分していた村を統一。さらに、木曾川を渡る立田大橋、長良川を渡る長良川大橋、揖斐川を渡る油島大橋と木曾三川を一挙に渡り木曾三川国営公園の建設で、愛知・岐阜・三重の三県の地域を中心に位置することとなりました。

平成五年からは、「第二次立田村総合計画」を策定し、自然と共生する快適環境の里をめざした各種施策に取り組んでいます。

ふるさとの街・探訪記

の都では平治の乱（一一五九）が勃発、敗軍の将となった源義朝一行は、青島の宿（現在の岐阜県大垣市）から杭瀬川に出て船に乗り、野間（現在の愛知蒲栗浜町）へ逃れました。その道中、立田付近に立ち寄り、た時の古事が残されています。村の伝承によれば、義朝一行が立田に現れたのは木曾川の河底、辺りに来た時、一行は、岸近くの藤石衛門と隣家の三右衛門に朝食の粥をこ馳走になる。しかし、義朝は落ち武者の身、礼をすする物もない。それで、義朝が再び世に出た時、御影藤石衛門、小笠三右衛門と名乗り出てくれ、といて立ち上がり、善に使った柳の枝を道にさして船に乗ったとい。

一向宗門徒と小木江の戦い

源氏が政権を樹立した鎌倉時代、大成荘は乱流する木曾川下流の自然堤防上に位置したため、しばしば水害を受けたので、堤防の修築が最大の課題でした。延暦年間（一一〇八～一一一三）元徳年間（一一三九～一一四二）、葛木堤料足として堤防修築費用が認められ、南北朝時代には年貢からも費用が捻出されました。

この頃、庶民の圧倒的な支持を得た浄土真宗、別稱一向宗の中興の祖、蓮如がこの地一帯を巡錫して以来、長島の願証寺（三重県亀岡町）などをはじめ寺々も多く門徒を擁していました。立田村にも真参門徒と呼ばれる五人の坊主衆がそれぞれ念仏道場を持つて活動。こうした一向宗の勢力は、戦国時代、天下統一をめざした織田信長にとっては騒々的な存在、門徒勢の分断を狙って、信長の弟の信興は小木江（現在の立田村森川付近）に城を築きましたが、元龜元年（一五七〇）十一月二日に一向宗

参考文献

- 「新編立田村史 通史」
- 「たつた村勢要覧一九九五」立田村発行
- 「わたしたちの立田」立田村教育委員会発行
- 「岐阜県地名辞典」角川書店発行
- 『明治河川改修以前の立田輪中』
- 愛知大学 総合郷土研究所紀要題四一輯刷一九九六
- 安藤萬壽男著

「福原の父」加藤太兵衛

太兵衛は天保七年（一八三六）、海西郡山崎村（現在の立田村山崎）に生まれました。福原新田を開拓した加藤太兵衛家は、二百石を有する旧家でしたが、宝暦・天保の大洪水などの水害で田畑は荒れ、幕末の頃は三〇石余りを残すのみ。そこで太兵衛は父と相談して家督を弟に譲り、安政六年（一八五九）、福原加藤家の養子となりました。その半年後、太兵衛は早速開墾に着手。堅固な堤防をも築造し、二〇万mを再墾、五〇戸ほどの家を立て、福原から離れたいったん人々を呼び戻しました。この他にも、弟たちとの共同で三福外線出新田（現在の愛知県弥富町）を干拓、熱田の海岸の堀を埋め立て市街地（現在の熱田港）にするなど、その活動は実に多彩。加立立学校の建設や神社の建て直し、「明治用水」への協力投資など、その生涯を開拓に捧げ、明治四〇年、七二歳で天寿を全うしました。



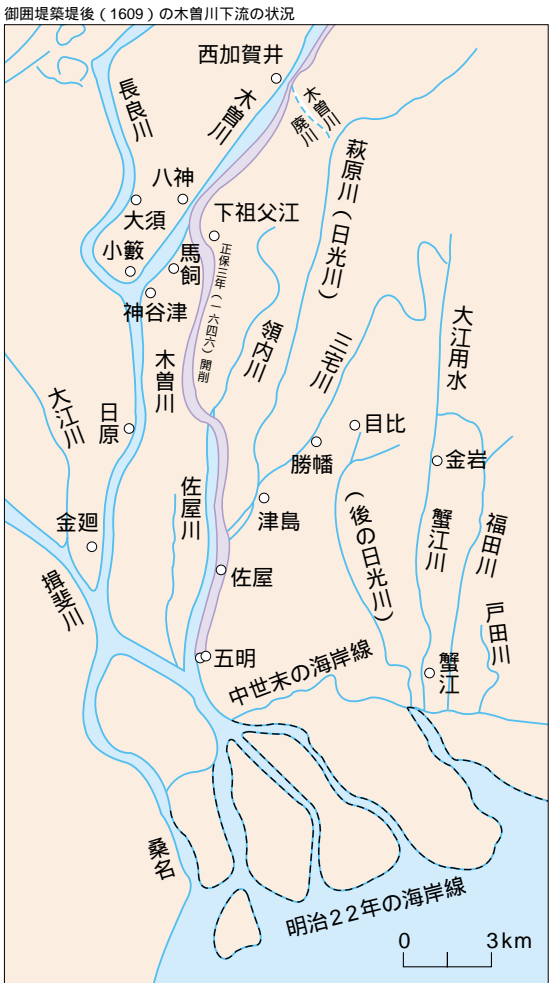
晩年の加藤太兵衛

立田輪中の用排水事業と地盤沈下対策

木曾三川下流部に位置する輪中地帯では、用排水事業は重要な課題。

立田輪中の東を流れていた佐屋川は、木曾三川下流改修によって廃川に。新たな用排水路を求め、さまざまな事業が実施されましたが、その抜本的な解決は昭和以降。

昭和三五年以降には地盤沈下問題も発生し、現在、県営湛水防除などが行われています。



この合流点のすぐ北、祖父江町十町野辺りで分流して佐屋川となり、立田輪中の東側を南流していました。佐屋川は天正の洪水により木曾川の流路が変わった時に形成されたもの。名古屋や桑名への水運は主としてこの川筋を通

● 輪中地帯の内水排除

日本を代表する大河である木曾川は、尾張や美濃・伊勢の国々に大きな恵みをもたらしてきましたが、時には暴れ、洪水となり乱流跡を残し、幾多の災害をも与えてきました。長年に亘って木曾川より運ばれた土砂によって自然に、あるいは人工的に田圃や宅地等を造成しました。また他方では、堆積した土砂により川床が耕地よりも高くなり、用水の取り入れや輪中内にとまった内水の排除を困難にするなど、多くの問題を引き起し小川から水勢の弱い木曾川の支流川（輪中内小川）から水勢の激しい木曾川への排水、輪中外の大河川）は物理的にも無理がありました。木曾三川下流部に位置する輪中地帯では、こうした内水排除、つまり排水事業が重要な課題だったので。

● 用排水の歴史的背景

天正の大洪水（一五八六）以降の木曾川は、犬山から後に築造された御田堤に沿って流れ、桑原輪中（現在の岐阜県羽島市桑原町）の南端で長良川と合流し、立田輪中の西側を南へ流れていました。この合流点のすぐ北、祖父江町十町野辺りで分流して佐屋川となり、立田輪中の東側を南流していました。

り、中でも木曾侯は、この流路によって熱田や桑名へ送られました。

正保三年（一六四六）には佐屋川の改修工事が行われ、立田輪中の用排水は主として佐屋川が利用されました。しかし、たゞに、常時流下する土砂や、洪水によっての土砂が佐屋川に流れ込むようになり、川底の上昇が起り始め、排水困難をきたすようになりました。

立田輪中では鶴戸川の水も佐屋川へ流していましたが、川底が高くなり流下が悪くなったので、万治元年（一六五九）、約二km下流の東船頭平に排水路を変え、枅を設け内水を放流することになりました。俗に「十二腹の枅」と呼ばれるもので、船頭平に七腹、大森に五腹、設置されました。

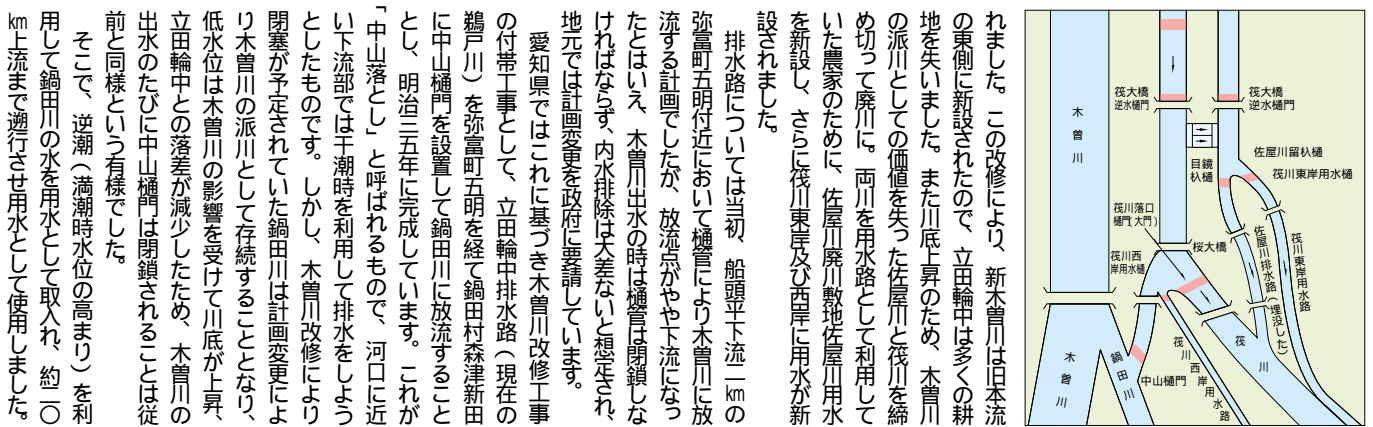
立田輪中のほぼ全域の排水をするためには、猿尾（水の勢いを緩やかにする小堤防）を出すのが通常の策。又右衛門新田と梶島から木曾川に突き出された五四〇mの猿尾は、立田輪中の排水を本流の水圧から守って放流しました。しかしそれでも、木曾川本流の勢いに圧迫されて輪中内の内水はなかなか排水できませんでした。

改修工事による用排水の変化

このような事情を背景にして、明治一〇年より木曾三川下流改修（明治改修）が実施さ



立田恵水中山樋門



立田輪中末端水利図

愛知県ではこれに基づき木曾川改修工事の付帯工事として、立田輪中排水路（現在の鶴戸川）を弥富町五明を経て鶴田村森津新田に中山樋門を設置して鶴田川に放流することとし、明治三五年に完成しています。これが「中山落」と呼ばれるもので、河口に近い下流部では干潮時を利用して排水をしようとしたものです。しかし、木曾川改修により閉塞が予定されていた鶴田川は計画変更により木曾川の派川として存続することとなり、低水位は木曾川の影響を受けて川底が上昇、立田輪中の落差が減少したため、木曾川の出水のたびに中山樋門は閉鎖されることは従前と同様という有様でした。

● 地盤沈下とその原因

この逆水による用水はこの地方独特の方法で全面的にも稀なもの、上流から水を取って下流へ悪水を流す用水の定説をくつがえし、下流から上流へ用水を流す珍しい方法です。

● 木曾川本流へポンプ排水

輪中の低湿地では潮の干満の差による自然排水だけでは大雨の被害から免れることができませんでした。さらに、昭和十九年の東南海地震、二〇年の三河地震による地盤沈下等により、内水被害は深刻なものに。昭和二二年には農地開発公団が船頭平に排水機設置工事に着手しましたが、翌年には農林省に引き継がれ、この工事は昭和二四年六月に竣工、付帯工事として鶴戸川の水を締切るために立切樋門を設置しました。



立田輪中立切樋門

三三〇馬力の排水機二台の排水量は毎秒六m³。排水問題は一気に解決し、このポンプ排水によって木曾川本流へ直接排水するとい

う多年の夢が叶ったのです。ところがこの排水機は戦争直後の資材で作られたため故障が続出し、構造的な欠陥もあって効果が上がりませんでした。そこで、昭和三年から翌年にかけて排水口並びに付属設備を大改造し、立切樋門も同時に補強しました。

AREA REPORT

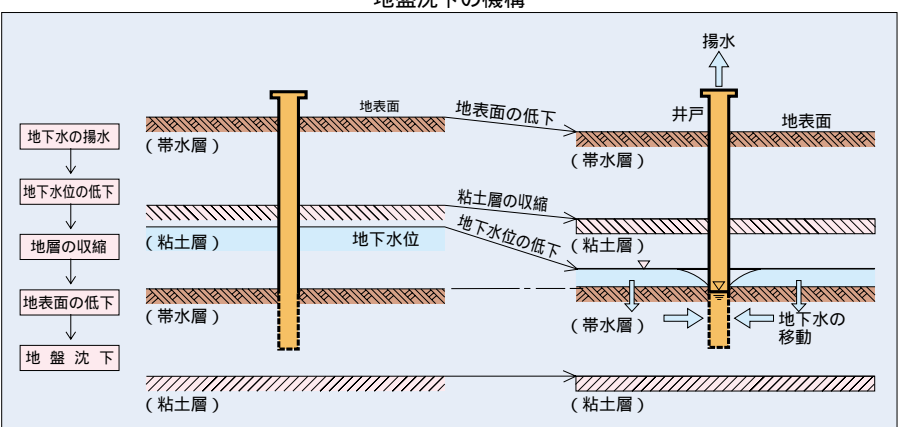


井戸の抜け上げ現象

● 湛水防除事業と地盤沈下対策事業

濃尾平野の地盤沈下が問題視され始めたのが前述した東南海地震、三河地震以降のこと。この地区の地盤沈下は古く地質時代から見受けられますが、その当時の沈下は年間一mm程度といわれている。その後、大規模な地震発生により一時的に大きく生じたことがあります。しかし、昭和三五年頃から地盤沈下現象が目立ち始め、急速に進行しました。その後昭和四八年をピークに鈍化の傾向は見せているものの、依然として地盤沈下は止まっています。

● 地盤沈下の機構



地盤沈下で、排水機の能力が低下し湛水被害が増大し、この頃、国内世論として天然降雨から家庭排水、工場排水等まで農民が負担するといふ旧来の方法に対し、国の責任において負担すべきであるという気運が高まってきました。こうして、湛水防除事業が施行され、昭和五二年七月、従来の排水機場のすぐ南に大型の排水機が設置されました。完成直後の九月、大型台風が来襲しましたが、立田輪中一帯は被害はなく、これも強力な排水機設置による成果といえます。

しかし、流域内開発による流出量の増加や地盤沈下の進化により、その排水能力も不足をきたすことになりました。そこで県営湛水



海部北西部地区早尾

防除事業立田輪中二期地区を平成二年度より実施。排水機の増設を行い、営農の促進や地域産業の振興を目的として、現在進行中で事業は進められています。

その一方愛知県では地盤沈下調査を進め、地盤沈下の激しい立田輪中を含む海部・津島地域の事業計画をとりまとめ、昭和五二年度より「尾張西南部地区」を第一号に指定し、県地盤沈下対策事業に着手しました。

事業の目的は、地盤沈下に起因して生じた農地及び農業用施設の効用の低下を従前の状態に回復するため、全体の計画の内容は、排水路四一m、排水路一一四一m、揚水機二か所、排水機二か所です。

参考文献
『新編立田村史 通史』
立田村発行
『木曾川農業水利誌』
（社）農業土木学会発行
『明治河川改修以前の立田輪中』
安藤萬寿男著
一九九六、愛知大学
総合郷土研究所紀要第四一輯抜刷

秋の村まつり

- 10月中旬 -
子ども獅子やおみこしなど、人々の笑顔が集う村まつり。地区によってだし物はちがいますが、稲の豊作を祈って行う祭りです。子どもたちが獅子となり、村内を練り歩きます。

秋葉まつり



- 12月16日 -
火の神様をまつるお祭り。秋葉神社の社前で朝からかがり火をたき、その火でさつまいもを焼いて食べると、冬中、病気をしないといわれています。

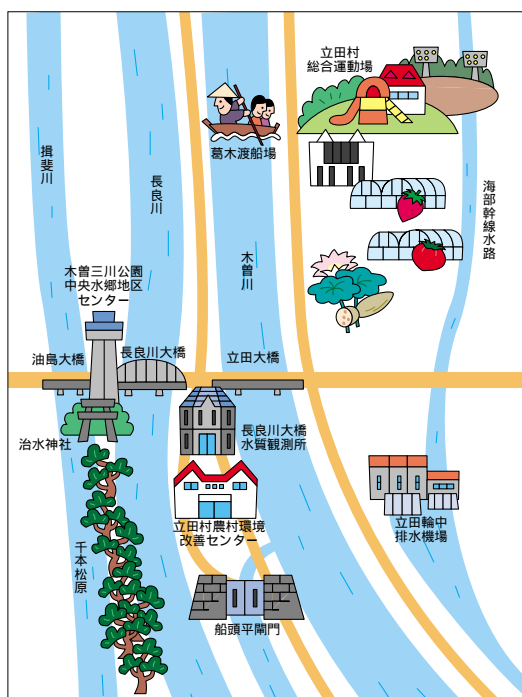
立田村農産物フェア

- 2月下旬 -
特産物の運根など、農産物を直売。レンコンうどんやレンコンのかば焼きなどの試食コナも人気を呼んでおり、鉢花、苗木、有機肥料などが無料配布されます。

ちょうちんとぼし



- 6月上旬～中旬 -
農作業の区切り(植付け、農上り)を祝って、子どもたちがちょうちんをともし行事です。小学生や中学生が火花をして祝います。



公共交通機関利用
名鉄津島駅から西へ車で10分
近鉄弥富駅から北へ車で20分

気ままにJOURNEY

葛木渡船・今昔物語

立田村の北、木曾川沿岸には、県営葛木渡船場があります。葛木は崇神天皇の妃の出身地といわれるところ。伝承によれば、この地は伊勢からの渡海船の着く湊で、葛木の渡しと称されていたのが千年以上も昔であったと記されています。
そもそも立田村は、交通機関のすべてを舟運でまかっていたところ。他の地域への交通はすべて舟。渡船は人々の貴重な足でした。葛木のみならず立田渡船、船頭平渡船、富安渡船、福原渡船など、多くの舟が木曾川を行き交っていました。
しかし、戦後のモーターゼーションの波と交通網の発達により、主役の座を自動車に明け渡すことに。昭和



加藤輝男さんと横井太郎さん渡船にて



立田大橋からの夕暮れ

川面に流れる季節のメヌエツト。 立田村にたおやかな時間は流れる。

美しい自然が息づく町

青田に揺れる稲の波。
さわやかな風が吹き抜ける木曾の川岸。
一面に広がるハス田は
収穫の時を迎えて、
季節は今、実りの秋。
豊潤な時が、また、歩き始めた。

近鉄弥富駅から木曾川に沿って北へ車を走らせると分かります。木曾川に沿って細長く連なる地。それが立田村です。木曾川沿いには、ハス田が一面に。湿地地帯という特質を生かしてレンコン栽培が古くから行われ、全国屈指の生産高を誇っています。

赤や白の大きな花を咲かせる蓮は、立田村の夏の風物詩。早朝には各地からカメラ愛好家が詰めかけるほど。大輪が花開く様子はこの世のものとは思えないほどの美しさです。だからでしょうか。仏様や菩薩様が鎮座ましましているのは、蓮の花の台座。蓮の花は極楽浄土を飾るにふさわしい気品と美しさを兼ね備えているのでしょうか。ちなみに芥川龍之介の小説「くもの糸」とは、蓮の糸のことだとか。極楽浄土との縁を結ぶという蓮の糸。しかし、心根次第では奈落の底に。芥川龍之介は心の裏腹を蓮の糸に例えたのでしょう。そんな蓮の栽培にまつわる伝説が、立田村には残されています。

立田赤レンコンと平野龍天

平野龍天は戸倉集落にある陽南寺の住職。僧侶として寺務を司るかたわらに、漢方医として村人を診療していたそうです。この僧侶は盆栽を好み、数多くの植物を蒐集していたのだとか。よき品種を求め、伊勢や近江地方へ旅を重ねる平野龍天は、そんな旅の道中、近江地方で美しい花を咲かせる蓮の花を見つけました。あまりの華麗さに



葛木渡船場

三〇年には県営渡船として、二つの渡船を運行するだけになりました。それが葛木渡船と立田渡船です。
しかし、立田大橋の完成により、立田渡船は廃止に。往時の姿をとどめているのは、葛木渡船のみとなりました。その渡船の火を守り続けているのが葛木渡船組合長の加藤輝男さんとお手伝いをされている横井太郎さん。この二人にお話を聞くことができます。

競走馬。昔、津島に競馬場があった時の話ですが、そりゃ怖かった。小さな木造船に、生きた馬が乗るんだから。そうそう、花嫁御寮を乗せたこともあったね。昔は、船で嫁に行きよったもんです。
伊勢湾台風の時には、遺体発見に駆け出されたこともありました。お陰様で立田には被害はなかったけれど、五千人以上の人々が水害で亡くなったという、悲惨な災害でした。他にも、川岸に生える雑草を対岸まで刈りに行ったことでもあります。これは、レンコン用の堆肥。何往復もしましたね。そんな渡船も立田大橋ができてからは、もっぱら観光用。今では一日一組か二組ぐらいの乗船ですが、親父も組合長をしていた関係で、私も組合長を務めさせて頂いていますが、息子も跡を継いでくれるというので、葛木渡船の火は、まだまだ健在ですよ。
横井太郎さんは、明治四〇年生まれ、九〇歳で立田村の古老です。しかし、足腰はかくしゃくとし、農作業もまだ現役です。
「私は船頭をしたことはないが、まあ、川と一緒に育ったよつなもんです。釣りもさんさん楽しんでましたし、川には四季の風景



葛木渡船に乗り込む小学生



深く心を打たれた平野龍天は、その蓮の根を村に持ち帰り育て始めた。

赤く美しい花を咲かせた蓮。これをさらに繁殖しようと掘り出したところ、意外にも大きな根が。漢方医という職業柄、当初は薬用に用いていましたが、煮ると柔らかかく、モチモチとした味わい。食用に適することを知った僧侶は、境内前の湿地に栽培し、付近の農家にも分け与えて、その増殖に努めたといわれています。

そもそも戸倉一帯は、稲作には不向きな湿地帯。米の出来いかなでは、出稼ぎにでも出なければならぬことも。しかも、稲作の閑期に収穫できることから、爆発的に普及していきました。

これが立田のレンコンの始まり。「戸倉レンコン」またの名を「立田赤レンコン」と呼び、立田を代表する特産品となりました。立田村役場付近には、昔日を偲び、赤レンコン保存田が残されています。

レンコングルメに挑戦!

輸入レンコンが全盛の今、おいしいレンコンにあたらなくなつたと嘆きの方々も多いことでしょう。その点、立田赤レンコンなら



「作り方」レンコンは皮をむいてすりおろす。水気を軽くしぼってボールに入れ、割りほくしたタマゴ砂糖、塩、小麦粉を入れてよく混ぜる。のりは一枚を八つに切り、木じゃもしの上におき、の六分の一をぬって、中央の背で切れ目をいれる。フライパンに油を熱し、レンコンの方を下にして入れ、こげ目がついたら裏返し、さつと焼いて取り出す。フライパンの油を切り、みりん、しょうゆ、砂糖を煮立ててレンコンを下にして両面に汁をからませる。粉山椒をふりかける。このメニューは精進料理の「ウナギ蒲焼風」をアレンジしたものだ。レンコンの粘りのある歯ごたえと、甘いしょうゆ味が絶妙にとけあって、おいしさもひとしおです。ぜひ一度、お試しください。

があります。秋には鴨が飛んでくるし、冬には白鳥も姿を見せてくれる。戦中・戦後のことですか。川の上流に工場が出来たせいか、一時、川がひどく汚れたこともありましたが、今ではご覧のようにきれいでしょ。畑仕事もまだまだ現役ですが、暇な時はこつて渡船場に来て、組合長さんのお手伝いをさせてもらっています。
葛木渡船の運行時間は、年中無休で、日の出から日の入りまで。ちなみに料金は無料です。秋晴れの休日、渡船に乗って木曾川の風景を楽しんでみるのも一興です。

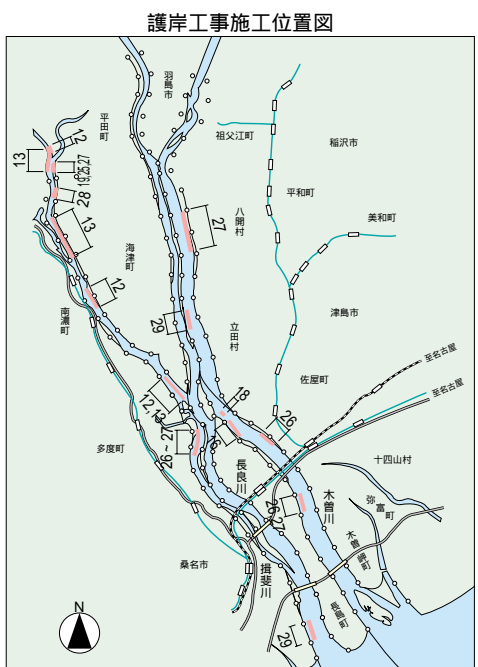
特集

木曾川下流
改修増補工事

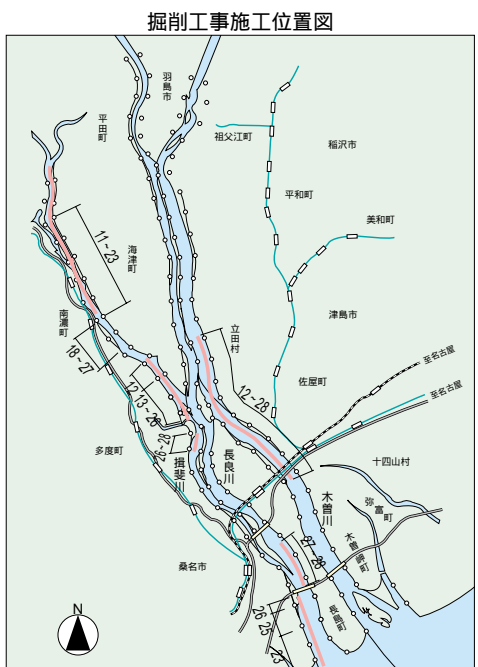
第二編

木曾川下流増補計画の主な工事と成果

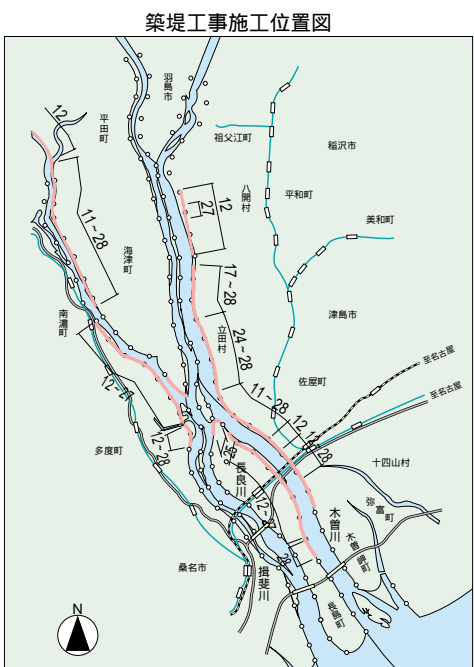
木曾川下流増補計画は、昭和十一年度より二〇箇年計画として実施。第二次世界大戦と終戦後の混乱により、計画変更を余儀なくされましたが、洪水の軽減や浚渫土利用による土地造成を実現。中でも農地造成による食糧増産は、戦前・戦後の食糧不足対策に、大きく貢献しています。



注 图中施工区間の数字は施工年度



注 图中施工区間の数字は施工年度



注 图中施工区間の数字は施工年度

予算と工費

木曾川下流増補計画は、昭和十一年度より二〇箇年計画として同十一年五月の特別議会で議案が可決されました。当初、総予算五十七万円でしたが、第二次世界大戦へと戦局が拡大するにつれて治水事業への予算が減少し、掘削築堤の各工事は着工したものの、ほとんどが打ち切り竣工となりました。また戦後の物価高騰によって総施工額は三億円を超えることになりました。この施工額の中には昭和五年度実施のアメリカ対日援助見返資金による施工額も含まれています。

下流増補計画の概要

「木曾川」
木曾川の改修区域は左岸が愛知県海部郡八開村、右岸が岐阜県海

ること。しかし、愛知県立田村福原においては輪中堤によって流路が二派に分かれているため、流れの疎通上支障が多いので、輪中堤を後退させて新しい堤防を築造し、派流を締切りました。堤防は天端幅を六mとし、その他は木曾川堤防に準じています。なお計画高水流量は四五〇〇m³/s。改修区域は左岸は立田村、右岸は大江村から揖斐川合流点までの総延長十一kmでした。

「揖斐川」
揖斐川は下流改修工事（明治改修）において予算などの関係上、堤防の拡築が施工できなかった箇所がある上に、南濃町太田など無堤の地区があり、出水状況によっては極めて危険な状態にありました。本計画においては、堤防の拡築工事を行うとともに、その他全川において築堤を実施しました。さらに浚渫などで流量低下に必要な河積を得ることにしました。

改修区域は、左岸は岐阜県安八郡和合村、右岸は岐阜県安八郡結村より伊勢湾までの総延長四〇km。支川・多度川、肱江川及び大江川は背割堤を設けて揖斐川本川との合流点を下流に移し、合流状態を改善しました。

「浚渫による余剰土の利用」
増補工事によって発生した浚渫土は、池沼・堀潰れ（田の外周にある堀のこと）、輪中地帯独特の農業方法の一つ）を埋め立て農地を造成しています。河川土砂の浚渫土の利用は昭和十八年ごろに岐阜県で実施しており、三重県でも昭和二年から行われていましたが、池沼や湿地の埋立などの内水面干拓が補助事業として正式に承認されたのは昭和二十六年のこと。翌年には「余剰土砂処分に関する内規」を木曾川下流工事事務所と三重の間で取決め、事業は遅滞なく進められています。

事業の実施箇所は、三重県内では、桑名市・七取・楠・長島・木曾岬の五箇所、約二二七万m³を実施。愛知県では立田輪中

で本工事に伴う余剰土砂を利用し、県営補助干拓としてクリーク・堀潰れ等の埋立事業を昭和二十六年に着工、昭和三九年には完工しました。埋立面積は五ha、土量は約一六八万m³でした。岐阜県でも高須輪中において、県営補助干拓として、池沼・堀潰れ二二ha、二九九万m³を埋め立てました。

対日援助見返資金工事

対日援助見返資金は米国からの援助物資を換金してそれを財源とした資金のことで、昭和二十四年四月に法律が公布され、昭和二八年に廃止されました。

この「米国対日援助見返資金特別会計」からの資金によって、治山治水事業が昭和二五年に実施され最上川・江戸川・信濃川・木曾川・淀川・吉井川・筑後川・石狩川の八河川の改修をはじめ、ダム、砂防などさまざまな事業が行われました。

木曾三川における対日援助見返資金は一億五千万円が計上されました。木曾川下流増補計画はこの資金に基づき掘削・浚渫・築堤・護岸の諸工事及び用地買収を行いました。

増補工事の成果

木曾川下流増補計画は、昭和十九年の東南海大地震、同二年の南海大地震により河川施設も被害を受け、昭和二十三年度からは地盤沈下復旧工事が着手されたため、それへの対応等から残事業はその後の改修事業に組み入れられ継続されることとなりました。

改修工事の成果としては、増補工事により沿岸耕宅地の水害の除去及び支川筋における洪水を著しく軽減することにより、農産物の生産を増加した点。

木曾川の洪水の度に脅威を受けていた名古屋近郊の被害が軽減した点。揖斐川は浚渫により洪水の疎通が良好と

対日援助見返資金工事実施概要一覧表

名称	箇所別	木曾川左岸	木曾川右岸	揖斐川右岸	全 体
計 画	施行地名	愛知県海部郡立田村弥富町	三重県桑名郡桶村長島村	三重県桑名郡七取野代村	
	洪水流量	9,700m ³	9,700m ³	4,500m ³	
	堤防余裕高	2 m	2 m	1.6m	
	嵩上高	1 m	1.6m	0.9m	
効果	氾濫を免る面積	11,780町歩	1,400町歩	1,241町歩	14,421町歩
	減産防止量	120,000石	22,000石	18,000石	160,000石
事業費	業 費	82,270,000円	31,160,000円	36,570,000円	150,000,000円
工 程	浚 渫	170,000m ³	—	90,000m ³	260,000m ³
	築 堤	110,000m ³	90,000m ³	90,000m ³	290,000m ³
	護 岸	16,000m ³	8,400m ³	—	24,400m ³
	其 の 他	変電所1送配電施設1式	—	変電所2箇所送配電施設2式	—
	用地買収	—	—	—	—
	用地	19.5石	—	—	19.5石
	家屋及び地上物件移転	2,612坪	—	—	2,612坪

増補による効果（岐阜県治水史・下巻）

水 害 損 失	氾濫面積 最近十箇年平均水害損失額	45,393ha 313,854円
増補により減少する水害損失	面 積 平均年額	45,393ha 313,854円
増補による増収	耕地面積 増額見込年額（一反当3円）	229,716反 899,148円
新に耕地になり得る土地面積 及び同上年額	面 積 同 額	1,916反 114,960円
増補による利益年額		1,327,962円
増補工事 増補工事に対する利益率		5,670,000円 23.4%



木曾川に浮かぶゆんせつ船

津郡東江村から伊勢湾に至る総延長二・三km。木曾三川下流改修（明治改修）時の計画高水流量七三五〇m³/sを九七〇〇m³/sに改訂し、派川・鍋田川には一〇〇〇m³/sを分派させることとしました。

そもそも鍋田川は木曾川の最大洪水に対して二〇〇〇m³/sにも達していましたが、河積が狭小なため二〇〇〇m³/sが流れ込めば川底の洗掘及び川岸の侵食が生じてしまいました。さらに、堤防が矮小薄弱なため堤防の決壊や溢水の恐れもありました。しかも鍋田川分派付近では土砂の堆積が著しく、これに全流量を流通しようとするれば多大な掘削と浚渫を要します。

そこで、鍋田川には木曾川最大流量に際し一〇〇〇m³/sを分派し、幹川流量を軽減することとしました。

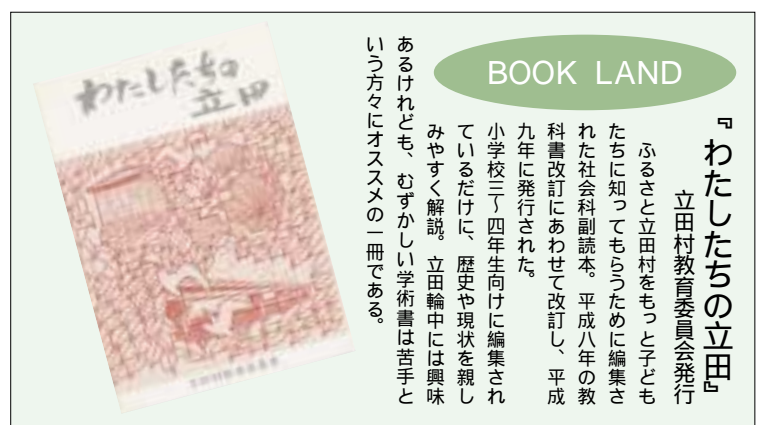
工事にあたっては、川幅は原則として現状のままとし、河積の不足は掘削と浚渫により解決することとしました。ただし、鍋田川分派付近は川幅が特に狭いため引堤、堤防は天端幅七m、表裏法一副勾配をとし、川裏には小段を設け、小段以下は二割五分勾配としました。

本計画の特徴は築堤用土の九割を浚渫土に依存していること。昭和三年度に千馬力の電動ポンプ船を用船就役させて以来、二・三・四年には、六百馬力・二百馬力の二隻を就役させ、また四百馬力を借り上げて浚渫を行いました。

「長良川」
長良川の本川は、もっぱら旧堤を拡築す

BOOK LAND

『わたしたちの立田』
立田村教育委員会発行
ふるさと立田村をもっと子どもたちに知ってもらうために編集された社会科副読本。平成八年の教科書改訂にあわせて改訂し、平成九年に発行された。
小学校三・四年生向けに編集されているだけに、歴史や現状を親しみやすく解説。立田輪中には興味あるけれども、むずかしい学術書は苦手という方々にオススメの一冊である。





安藤 萬壽男先生

略歴
愛知大学名誉教授・前愛知産業大学総長・経済学博士
輪中、その形成と推進、など輪中に関する著書、論文多数。

立田輪中の形成

尾張藩内では「輪中」という言葉はもともとはなんらか社会経済上で共通点をもっている地理的範囲をさしてきたといえる。例えば、現在の海部郡佐屋、弥富両町にまたがる近世の西保以下の八ヶ村を「尾張御行記」は市江輪中とよぶが、それは津島祭礼の山車を出す組合だとしている。立田輪中の中でも、尾張藩に関連した文書の「御高問答」や尾張御行記には「早尾輪中」「富安輪中」という名前が出てくる。それらが属する村々を近世の村別で図示(図2)すると、それらは、共通した水上上の懸廻堤で囲まれた村々ではありえないことが判る。筆者はこれを分析して、その名前はそれらの村々が尾州藩成立以前の大名のまとまった所領であった範囲や古い庄園の範囲に由来すると判定している。

図1 旧村別立田輪中

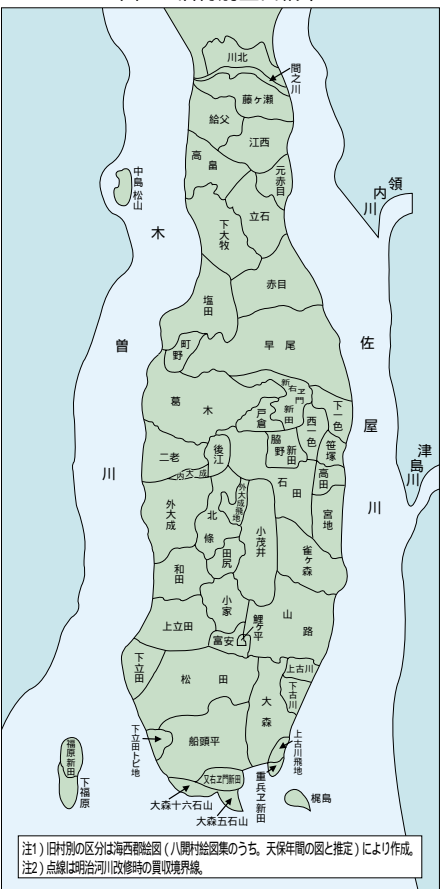
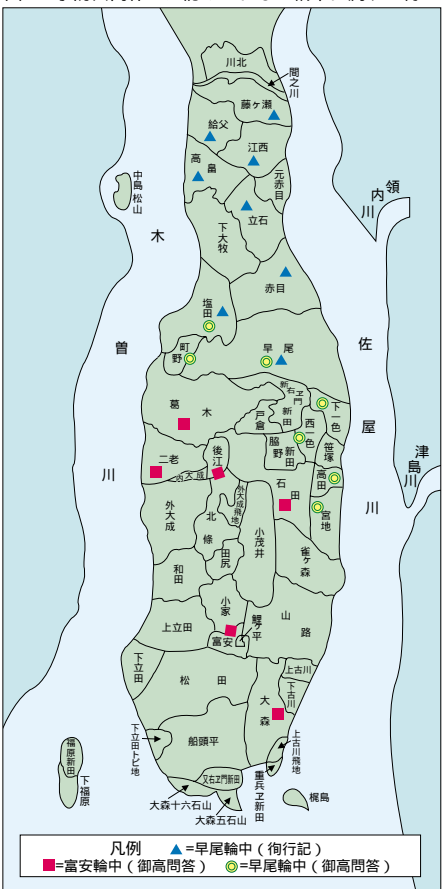


図2 水防共同体とは認められない輪中に属する村々



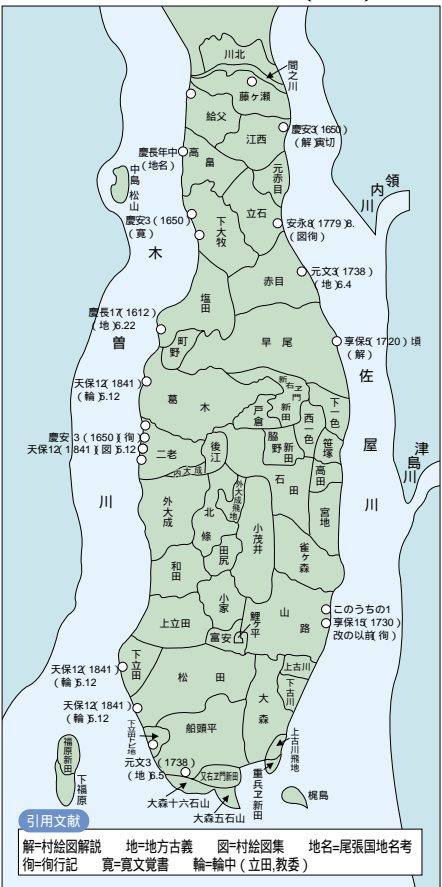
遼史からみて推定できる。懸廻堤を造成したのは、堤内への洪水の侵入を防ぎ、既開発の耕地の安定した収穫を図るだけでなく、新田の開発をめざしたといえる。村々が暮末時に、立田輪中の藩に出した村絵図をみると、立田輪中南部の村々の間では、南(下流)側の村の中に、北(上流)側の村の飛地がいくつもあがる、それは開発の過程を示しているといえる。

立田輪中の特色

立田輪中は濃尾平野の中で、自然堤防・後背湿地地域の末端部とそれに続く三角州の上に位置している。明治改修以前は、この輪中の東西の巾は最大でも約2kmであったが、南北はその四倍ほどとも約7kmで、長い大輪中である。その西には長良川を合した木曾川の主流が、その東は木曾川の分流である佐屋川が、そして、その北は木曾、佐屋両川を結ぶ間之川が、それぞれ流れて、完全に外川に囲繞された輪中であった(間之川は文政九一八二六、年完全締切)。立田輪中の後背低湿地に相当する処を南北に流れて、この輪中の悪水を堤外に排出する機能を果たしてきたのが鶴戸川である。鶴戸川は万治二(一六五九)年までは(旧)川路村の北で佐屋川に排出していたが、佐屋川の土砂堆積、河床上昇のため、同川への排水が不良化したため、瀬替をし、輪中の南端(旧)船頭平・大森の間に排出の枵を設けて、現在に到っている。

南北に細長の立田輪中では輪中内の北部が海拔二五・〇五mであるのに対し、南部の三角州地域は海拔〇m以下である。このことが輪中内の南北の村々の間での悪水をめぐる争いの基因であると共に南部の村々が悪水停滞に苦しんだ要因でもある。一般にこの輪中でも輪中内の高低差に因る悪水排除で対立がおきているが、この輪中はその顕著な事例といえる。

図3 立田輪中破堤場所(印)



木曾川水系の山部に近代、ダムができるまでは木曾川では大量の土砂が平野に運ばれ、輪中形成以後はそれが河床にのみ堆積して河床上昇をもたらし、破堤などの水害多発の基因となった(図3)。そして、川に運搬・堆積した砂は冬期に卓越する西風の影響で川の東岸に吹きよせられ、河岸砂丘を形成した。破堤時にはこの砂が大量に村内に流入、堆積し、「砂入」地が広く村絵図に記入されている(例)。(旧)葛木、二老両村。

このように近世以来、破堤などの水災が頻発しているため、尾張藩は代官所を通じて、平水時にも役人や指名した庄屋による堤防の見廻りを怠らないように指示し、また杭・明俵などの水防資材を村々に備蓄させ、そして大水時には水防活動のため、村々から出動すべき夫を細かく規定していた。この水防体制をみると、一國全部を支配していた藩の、上からの画一的、統制的な特色がよみとれる。

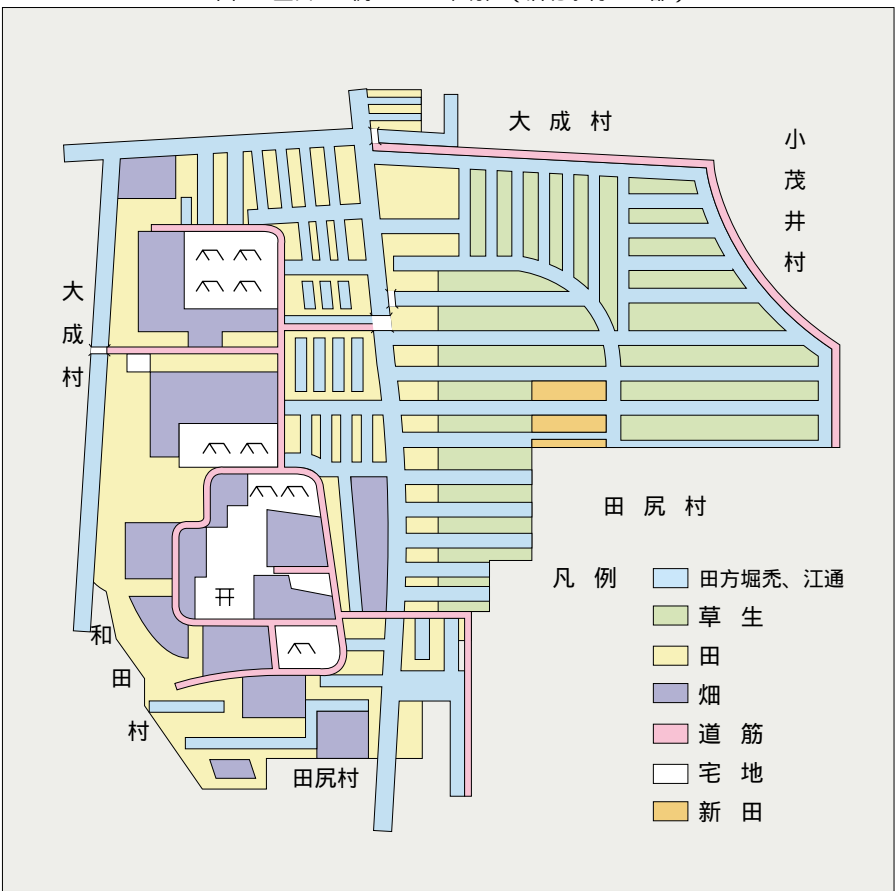
低湿地土地利用の特色と改良への努力

近世、新田を開発し、支配者の検地をつけ、石高が定った当初は、以下に述べるような重田(堀田)はなかった。その後、悪水が停滞するようになると、水田を高くし

て稲の水腐れを防ぐため、重田を造成するようになったのである。悪水停滞の原因は三つに大別できる。(一)それまで薄などが生えていた土地を干拓して水田にする土地が固まり、高度が低下する。それにもまして、地震がおきて地盤が一度に沈下することが大きい。幕末の村絵図の中に、「地震ゆり込」地震痕」と袖書されているのがそれである。(二)輪中を囲む外川に土砂が堆積し、輪中内の土地が外川の河床に比べて相対的に低くなり、悪水の排出が難しくなることである。(三)既述もしたが、輪中内の高位部から低位部に流下してくる悪水が低位部の悪水停滞量を増加させることにつながる。

輪中低位部で稲の水腐れを防ぐため、水田面を高くする最も一般的な方法は自己の水田の一部を堀とし、その土で残りの水田面を高くする方法(重田、堀田、畔田など)とよぶ)である。重田化が藩によって認定されると、堀の面積だけ「禿」として免税となった。その他に、(一)畑の土をとって低い水田におき、その旧来の畑も水田とする方法(畑田、切上田、土取田)、(二)外川の河床の土を田舟にて、輪中堤の土砂乗込枵や溝渠を通して低い水田に置土する方法、が行なわれた。この(二)に対しては幕府に嘆願し助成をうけている。

図4 重田の1例-1850年現在(旧北条村の一部)



重田の分布をみると(旧)町野、葛木新右衛門新田、下一色の各村を結ぶ線以南の低湿地にみられ、南下するほど堀の密度が高まる。上述した理由により、立田輪中での重田の出現は十八世紀以降とみてよく、そしてその後、重田化してもまた稲の栽培が出来なくなると草生地化した土地が幕末時の村絵図には村々の低位部にみられる(図四)。このようにこの輪中の低位部に多くみられた重田も一九五一年から始まった、国・県の援助による内水面干拓事業によって埋立てられ、排水機も設置され、低湿地輪中のシンボルであった重田の景観は全くその

- 引用文献
- (一)名古屋市教育委員会編「尾張御行記(五)」、一九八四
 - (二)徳川林政史研究所編「御高問答」一七五六
 - (三)立田村文化財専門委員会編「立田村近世村絵図集」一九九一
 - (四)立田村史編さん委員会編「新編 立田村史 通史」一九九六
 - (五)安藤萬壽男「明治河川改修以前の立田輪中」愛知大学総合郷土研究所紀要第四一輯一九九六
 - (六)安藤萬壽男、同右(続)、同右第四一輯一九九七

民話の小箱

いたずらきつねのお話

伝説や民話には、よくきつねに化かされるといふ話が出てきます。きつねがコンとひと鳴きすれば、水もしたたるような美女に。農夫の女房におさまって、子までもうけるくたりは全国各地に残されています。

悪賢く、人をだましながらも、きつねは、どこかで人々に愛される存在だったのでしょつ。
「きつねの嫁入り」「きつねびより」「きつね火」「きつねに包まれる」「きつねためぎの化かしあい」など、きつねにちなんだ言葉は、たくさん残されています。
では、立田に残されたきつね伝説を紹介しましょう。

小茂井の女きつね

青田が稲穂をなびかせ、ハス田は収穫の時を迎える。立田村の中央部に位置する小茂井集落は、緑鮮やかな農業地域立田村総合体育館、立田農協ライスセンターなどが立ち並び、豊かな実りの時を、今か今かと待ち受けているようです。そんな小茂井集落も、かつては人もまばらな寒村。村の若者は、嫁とりには苦勞を重ねていました。そんな時代のこゝ。

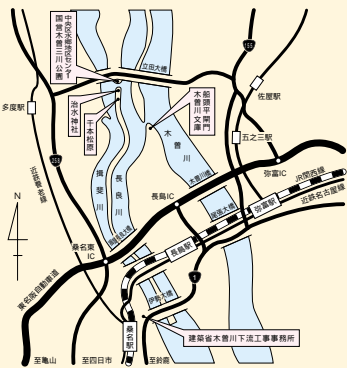
女きつねは目も覚めるような美しい娘に化けて、村の若者が通るたび、気を引いたとか。あまりの美しさに目がくらんだ若者は、女きつねのいたずらと知りながらも、娘の小屋までついていったのだとか。おいしい馳走や酒をふるまわれた若者は、いい気持ちになって、眠ってしまったのだという。しかし、目が覚めれば、そこは、津島の下新田の火屋（火葬場）。若者の嫁とりの苦勞を伝えるきつねの伝説です。

葛木の渡しに住む腹へんきつね

むかし、むかしの渡船場は、たいそうにぎわっていたそうです。しかし、木曾川の改修をした時に、みな他へ移ってしまい、たった一軒だけ、家が残ったとか。この家の縁の下に一匹のきつねが住み着くようになりました。そのきつねは夕方になると舟を待つ小屋に出てきて、舟を待つ人がお年寄りならお年寄りに、若い娘なら若い娘に化けて、なれなれしく近づいて声をかけたのだとか。なんといつてもきつねは腹へんで、人々のもつ弁当だけが命綱。何かご馳走でももって来れば、うまくだましてすっかり中身を食へ、折り箱だけにしてしまったとか。しかし、この腹へんきつねもいつのまにか姿を消してしまいました。葛木渡船の昔をしのぶ、もの悲しいきつね伝説です。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
 《入館料》無料
 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島I.Cから車で約30分
 東名阪長島I.Cから車で約10分
 《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・
 木曾川文庫
 〒496 愛知県海部郡
 立田村福原
 TEL(0567)24-6233



編集後記

平成7年7月から始まった長良川マウンド浚渫が、今年の7月に完了。2年1ヶ月で150万m²の川底の土砂が取り除かれ、治水安全度が大幅に向上しました。
 8月7日には地元主催の「長良川マウンド浚渫完成感謝のつどい」が長良川河畔で開催されました。
 9月4日には、長良川沿川の三重・岐阜・愛知三県の11市町村長が、21世紀の長良川と沿川地域のあり方を語る「長良川船上サミット」が開催されました。
 Vol.24にあたっては立田村役場ならびに安藤萬壽男先生にご協力をいただきました。ありがとうございました。
 次回は、愛知県弥富町を特集、歴史ドキュメントでは、伊勢湾台風をご紹介します。ご期待ください。

表紙写真

上:木曾川の夕暮れ

中:立田村の花 アカハス

下:立田排水機場